

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏名	渡 勇輝
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第123号
学位授与の日付	2023(令和5年)年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学位論文題目	柳田国男と「大正期」の「神道」 ——「神道私見」を起点に
論文審査委員	主査 斎藤 英喜（佛教大学教授） 副査 八木 透（佛教大学教授） 副査 大谷 栄一（佛教大学教授）

### 〔1〕論文の概要

柳田国男といえば、「日本民俗学」の創始者として広く知られている。したがって、これまでの柳田国男をめぐる議論は、民俗学史の範囲のなかで行われたものが多い。これにたいして本論文は、柳田国男の学問を「近代神道史」の視角から読み直し、そのあらたな可能性を探求するものである。すなわち柳田が「神道」研究と積極的な交渉を築いていく大正7年（1918）の「神道私見」を起点に、雑誌やメディア、学会という人的・学的な知のネットワークのなかから柳田のテキストが形成されていく過程を分析し、神道をめぐる「大正期」という時代の画期性を明らかにしていくものである。

全体の目次、構成は以下のとおりである。

はじめに——柳田国男と「神道」

第一章 研究史の整理と本論の課題

第一節 柳田国男と神道研究

第二節 「国家神道」研究の進展と大正期

第三節 「神道私見」の新しい評価軸

第四節 課題と方法

第五節 本論の構成

第二章 「神道私見」と大正期の「神道」——近代神道史のなかの「神道私見論争」

第一節 「神道私見論争」概要

第二節 論争で争われた「神道」

第三節 近代神道史のなかの「神社」と「神道」

第四節 「神道私見」の射程

第三章 神道談話会とその時代——『郷土研究』から「神道私見」へ

第一節 神道談話会という組織

	第二節	神道談話会のネットワーク
	第三節	柳田神道論の形成過程
	第四節	「神道私見」とその影響
第四章		日露戦後の「神社」論の展開とその批判——「塚と森の話」を中心に
	第一節	『斯民』における「神社中心説」の展開
	第二節	「浮浪人」と「塚」の信仰
	第三節	山稜と「鎮守の森」をめぐって
	第四節	宗教者と「中世」への眼差し
第五章		交錯する「平田派」の系譜——大国隆正と宮地巖夫に注目して
	第一節	「平田派」批判と大国隆正
	第二節	幽冥論の系譜と宮地巖夫
	第三節	『山の人生』と宗教者
第六章		柳田国男と加藤玄智——新仏教運動・迷信・国家的神道
	第一節	「人身御供論争」の焦点
	第二節	新仏教運動と「迷信」
	第三節	「国家的神道」論と「神道私見」評価
	第四節	「神道私見」から「人神考」
		おわりに——成果と展望
		付録資料：神道談話会開催記録

以下、目次にしたがって本論の概要を紹介する。

**第一章**では、本論のテーマにかかわる先行研究史を整理して、問題の所在を明らかにする。すなわち、これまでの「国家神道」をめぐるイデオロギー論的な議論、あるいは国家神道 VS 民俗の構図を超えて、近代神道史の同時代的な文脈のなかに柳田国男の言説、学知を位置づけ、「大正期」における近代学問の形成過程にあらわれた多様な神道論の一つとして読み直すことを提示した。そこで駆使されたのは、雑誌メディア、学会という場や人的・学的ネットワークの現場から、「テキスト」を読むという方法である。柳田の「神道」をめぐる議論が「どのような歴史的な文脈や問題意識のなかから展開してきたのかを、同時代の神道学者との関係に注目しつつ基礎から位置付けていく」ことである。

以上の問題設定から、**第二章**では、柳田国男の「神道私見」とそれをめぐる河野省三との論争を対象にして、明治期の「国家的神道」にたいして、国家や社会の成熟に対応した「国民生活を当体」とする「神道」の在り方が議論されたこと描き出した。

こうした柳田の「神道」論が形成された場として、**第三章**において、柳田が参加していた東京帝国大学の神道談話会という組織に注目する。そこで神社神職ではなく、大学アカデミズムの学者たちが「神道」をめぐって議論し、あらたな認識が形成されたことを明らかにするとともに、加藤玄智や田中義能など、黎明期の神道学の議論のなかから、柳田の「神道私見」とは、じつは東京帝国大学を中心とする神道研究の潮流への批判にあったことを明らかにした。

**第四章**では、日露戦後の状況下で著された「塚と森の話」(明治 45)に注目する。そこから柳田の議論が、「神社」の活用論や、史跡名勝天然記念物保存法運動、さらには「浮浪

人」という社会問題のなかから形成されてきたことを報徳会機関誌『斯民』の思潮と比較し、柳田が「民間宗教者」の問題に着眼していったことを指摘した。また、同時代の神社中心主義の論点から形成されていく「鎮守の森」言説は、本居宣長や平田篤胤ら近世国学の再解釈の営為と密接にあったことを指摘する。

この論を受けた**第五章**では、柳田と「平田国学」の関係性をあらためて思想史的なレベルから再検証した。とくに、これまで漠然と理解されてきた柳田と「平田国学」との連続性にたいして、大国隆正と宮地厳夫という二つの思想的系譜を提示し、柳田が批判的に取り上げる「平田派」とは、大国隆正、近代文献学、神道談話会へと至る近代学問の系譜であったこと、他方で、「平田学の正系」を自認する宮地厳夫、星野輝興など宮内省掌典の宮廷グループと柳田の交流を確認した。そこから柳田の幽冥論が、宮地たち、異端的な「平田派」の系譜にあることを明かにし、柳田の山人論の射程の再考を提起した。

**第六章**では、柳田が対峙した「大正期」の学知の全体像を見通し、柳田と長い関係を築いてきた加藤玄智と比較することで、新仏教運動から新宗教運動、さらには神道談話会へという大きな流れをとらえつつ、柳田の学問の立脚点が「迷信」や「伝説」の特異な評価にあったことを指摘した。また、近代仏教研究の成果を受けることによって、加藤の「国家的神道」論を新仏教運動からの連続性としてとらえなおすとともに、精神主義運動の潮流から柳田の学問形成を再考できる可能性を提示した。

以上によって、柳田国男の学問を「民俗学」の形成史に限定せずに、近代神道史、さらには近代宗教史と学問史とを架橋させる歴史的なダイナミズムを論じたことをまとめとした。

## [2] 審査結果の要旨

まず本論文の評価すべき点は、なによりも明晰で論理的な文章表現とともに、きわめて実証的な論の組み立てによって、これまでの柳田国男論の盲点に果敢に切り込み、従来とは異なった柳田国男論を提示したことにある。それは民俗学の学史とともに、近代神道史研究において斬新な研究成果であると判断できる。

具体的には、柳田国男の「神道私見」を、近代神道史の視角からたどることで、従来の「柳田民俗学」の形成史からは見えてこなかった人々との交流や学的ネットワークを明らかにし、雑誌やメディア、学会という具体的な場のなかからテキストが形成される過程を分析した方法論の新しさにある。

そのことによって、これまでの「国家神道」のイメージ、すなわち多くの国民を精神的に呪縛し、アジア諸地域にたいする侵略戦争を支えた「国家宗教」という従来の定義を超えて、明治後期から大正期にかけての国家や社会の成熟、変貌のなかで「国民生活の当体」としての神道という認識や学知を導きだした、「思想運動」の担い手たる柳田国男の相貌を明かにしたことにある。さらに本論で論じられた神道談話会や「平田派」の近代、心霊研究、新仏教運動などへのひろがり、柳田研究のみならず思想史研究、近代仏教史研究、近代宗教史研究への多様な論点を開いていくものであり、本論文の成果は、近代思想史研究の新しい潮流のひとつとして注目されることは間違いない。

一方、民俗学史の立場からも、大正期における柳田国男のとらえ直しが可能となったこ

とも大きい。すなわち従来の漂泊民、山人をめぐる研究から、定住民、農耕民=「常民」研究へと展開(転向)したという、従来の柳田評価にたいして、大正期の柳田が「国民生活の当体」としての「神道」という視野にたつことで、漂泊民から定住民へという認識を覆す柳田像の可能性を提示しえたからである。

かくして本論文は、柳田の学問を「大正期における近代学問の地殻変動のダイナミズム」に位置付けなおすことで、近代宗教史と近代学問史を架橋する営みとして評価することができるのである。

しかし細部の叙述においては、いくつかの疑問点もある。とくに第六章の叙述において、加藤玄智が狭義の「新仏教」から登場したことは間違いないが、しかし近代仏教史研究において「新仏教運動」には、明治32年(1899)に結成された「仏教清徒同志会(後の新仏教史同志会)」を狭義の新仏教として位置づけるが(大谷栄一「新しい仏教とは何か」)、一方、広義には戦前の仏教改革運動全般を指している(池田英俊『明治の新仏教運動』)。この点、渡論文で両者が混在することで、論述が曖昧になっていることが指摘された。

また柳田と近角常観や綱島梁川の「実験」や、岡田虎二郎の岡田式静坐との関連性は検討すべき課題であるが、上記の人びとの「実験」は、「精神主義」とは関連がない。したがって「柳田の「実験」という体験の重視や心霊研究への寛容な理解」は、精神主義と繋がる「新仏教運動の潮流の流れ」にあるものとは断定できない。だが、こうした論述の曖昧さなどは、本論文が近代神道史研究と近代仏教研究とを架橋させる試みの途上にあることを示しているものといえる。

また民俗学史からも、第六章において「加藤の国家的神道論や寛の君臣一体論とは異なる神道像」を柳田の民俗学の思想的特質として論じているが、では柳田は「天皇」についてどのように考えていたのか、その点の言及が明確ではないことが指摘された。これは同じように民俗学の学問を進めた折口信夫が「天皇霊」論や「みこもち」論など、天皇論が重要なテーマとなっていることに比較して、柳田と折口の違いとして、さらに追及すべきではないか。とりわけ「斎藤が明らかにした折口の神道論の射程は、(中略)柳田の研究から導かれたところが大きく、とくに柳田は折口以上に、加藤玄智や寛克彦などの人物との具体的な接点や、当時の社会思想も含んだ広範な論点に接近することができる」という本論文の指摘は、一面は認められるが、しかし折口信夫の「鎮魂」論、「神道宗教化」論など、柳田とは異なる神道の宗教性の追求が見られることなど、その相違点には、さらに考察が必要となるだろう。これとかかわって、昭和戦時期、「総力戦体制」下における柳田国男の位置づけは、今後の課題として大きいものになることが指摘された。

以上のような近代仏教史、近代神道史、民俗学史からの疑問点など、とりわけ第六章の論述には問題点が指摘されることになったのだが、しかし、それ以上に本論文が提示した、近代神道史における柳田国男の位置づけの斬新さや、さらに近代宗教史と学問史とを架橋させる問題意識の射程の長さなど、今後の研究の進展を大いに期待させるところである。本論文の成果が、民俗学、近代神道史研究、思想史研究の各分野に多くの問題提起をし、議論を巻き起こすことは間違いないだろう。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判定する。